令和6年度 学校評価書

山形県立酒田特別支援学校

学校教育目標 学びを楽しみ、よりよく生きる人を育てる めぐす子ども 明るく元気に楽しく学べる子ども 自分のことに自分で取り組む子ども まわりの人と仲良くする子ども

経営の方針 全教職員が「聴覚障がい教育」「知的障がい教育」の2障がいに対応する特別支援学校であることを理解し、自らの専門性を培い高め、幼児児童生徒、保護者との信頼関係を大切にして、個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づく指導を行い、教育目標の達成及び幼児児童生徒が確かに成長する学校となるように努める。
1 幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育の実施
2 地域の特別支援教育のセンター的役割の発揮

【評価】 達成度 A：達成できた（8割以上） B：ほぼ達成できた（6～7割） C：あまり達成できなかった（4～5割） D：達成できなかった（3割以下）

保護者、教員アンケートによる評価＜そう思う、だいたいそう思う、あまり思わない、まったく思わないによる4段階評価のうち、AとB合計の割合＞

（教）教務部 （総）総務部 （学）学習部（生）生徒部（健）健康安全部（進）進路部（研）研究部（就）就学支援センター（聴幼）（聴小）（聴中）（知小）（知中）（知高）

今年度の重点1 安全・安心

項目	具体的方策・評価指標等	課題内容	達成度 項目番号	改善策
① 健康指導等	○ 学習環境の整備と健康に配慮した指導。スポーツタイムや体育の指導。（知高）	○ 一般就労を目指す生徒にとっては、今のスポーツタイムや体育だけでは、必要な体力がつきにくい。	A 保護者 2 保護者 5 職員 5	○ 新年度、生徒の実態も含めてねらいを明確にして学部体制で考えていく。
② 危機管理対応	○ 感染症防止対策及び学校運営方針に基づいて、日々の学習を工夫しながら教育実践を行う。（教）	○ 病気後の復学への対応の仕方がケースバイケースで異なるため、管理職でなければ対応判断ができなくなっている。	A 保護者 2 職員 6	○ 欠席の電話は管理職が受け、必要に応じて担任や学部主任につなぐ。
③ 教育環境	○ 日常的に職員間で情報共有を行い、児童の発達段階を共通理解しながら指導・支援にあたる。（聴） ○ 全員で生徒全員を支援し、一人で悩まないような体制を作っていく。（知高） ○ 職員間の連絡調整（教）	○ 学部会を定期的に開催することができなかったが、以前より情報交換や課題を話し合い、児童の様子を共有しながら、進めることができた。 ○ 行事とその前後に落ち着かなくなる生徒がいた。 ○ 職員の動静や感染症による別室対応の実施に伴い、普段の授業や夏場のプール活動での指導・支援で職員が手薄になることがあった。	A 保護者 3 職員 7	○ 学部会を行う時間と場所を明確にする。 ○ 事前に体制を確認し、共通理解をしながら必要な支援をしていく。 ○ 補欠割り当てやプール活動（次年度）は、学校全体でカバーし合い体制を整えていく。

今年度の重点2 豊かな人間性を育む交流及び共同学習の推進

項目	具体的方策・評価指標等	課題内容	達成度 評価項目	改善策
① 交流及び共同学習	○ 交流や共同学習及び居住地校の特別支援学級との交流を推進し、生活経験の拡大や社会性の伸長を図る。（聴） ○ 校外での学習や地域交流を通しての障がい理解や経験の拡大と社会性の向上（知小） ○ 地域を中心とした交流や校外活動の展開。（知中）	○ 光陵高との手形製作交流は、来年度から間が空くため、再開できるように引き継ぐ必要がある。 ○ 交流では、回数や内容を検討し、より充実した活動にできないか。 ○ 地域等の外部との交流活動を増やしていきたい。	A 保護者 4 職員 1 2	○ 機会を捉えて、相手校の担当教諭と交流の再開の仕方などを相談し、決めておく。 ○ 回数や時期、活動内容を検討し、西荒瀬小と打ち合わせを行い、来年度の計画を立てる。 ○ バザーなど現在行っている活動に市内の中学校の特別支援学級を誘う形で実現できるように進めていく。

今年度の重点3 早期からの自立と社会参加に向けた進路指導

項目	具体的方策・評価指標等	課題内容	達成度 評価項目	改善策
① めぐす子ども像	○ 基本的な生活習慣に関わる取り組みを重視し、将来を見据えた生活・進路指導（知小） ○ 学部間で一貫性のある適切な教育課程の編成と授業づくりを行う。（教） ○ 幼児児童生徒が安心して、やりがいをもって学習に取り組めるよう、幼児児童生徒の実態や課題を把握し、学習面や生活とつながる指導を行う。（研） ○ 各学部と連携して、校内教育支援委員会やケース会議、諸検査を実施し、就学や支援の在り方等について検討する。	○ 保護者と協力し合って取り組む面も多いが、歩調を合わせて取り組むことが難しいこともあった。 ○ 修学旅行計画に関して、年度によって子どもの実態が異なるため、各学部の発達段階に応じた一貫性のある行き先の最終検討が必要である。 ○ 実施記録について、書く内容を細かく指定していなかったため、みなさんの書きぶりに差があった。 ○ 深刻なケース以外でも、少人数でケース会議を開催してはどうか。	A 保護者 1 職員 2	○ 引き続き学部会やグループ会、普段の会話の中で、お互いに情報の共有を行っていく。 ○ 教務部内における修学旅行小委員会での検討を経て、マニュアルを完全な状態にし、活用できるようにする。 ○ どんな教材を使ったかや、どこでつまづいているかが分かる簡潔な書き方を今年度中に検討する。 ○ 就支センターメンバーが中心となって担任や学部主任と連携し、場や時間等をセッティングする。
② 生徒指導	○ 交通安全について・自力通学手続き等・自力通学生集会・通学安全指導・交通安全教室（生） ○ 児童生徒の発達段階に応じた性教育を担任・養教と連携し行う。（健）	○ 旧寄宿舎南側道路の歩き方について、共通理解したい。 ○ 生徒の実態をみながら指導をしているが十分ではない。	A 保護者 3 保護者 5 職員 4	○ 生徒部内で安全に登校できる歩き方を話し合い、全校に周知する。 ○ 個別に必要な生徒に主任や養教と連携しながら実施していく。
② 進路指導	○ 児童の将来像を見すえ、保護者と共通理解を図りながら発達段階に合わせた適切な進路指導を行う。（聴） ○ 進路に関する情報提供や計画的な面談を行い、自分のよさを生かした進路選択や自己実現の支援を行う。（聴） ○ 事業所見学、職場体験（知中） ○ 進路指導の充実。保護者、関係諸機関との連携し、適切な進路の実現に努める。（知高） ○ 職員進路研修会や職員施設見学研修、職員施設体験研修等を計画・実施し、進路指導の専門性の維持・向上を図る。（進）	○ 進路にむけて、どんな力を今はつけていきたいのかをより詳しく保護者と共通理解して支援にあたっていきたい。 ○ 関係機関との情報交換やケース会議の実施が後手に回り、聴覚部全体での共通理解を円滑に進めることができなかった。 ○ 学年によっては、職場見学への保護者の参加が少なかった。作業学習を通じて、働くことにかかわる力は高まっていると思うが、職場見学の時期だけ、将来の話などをしても理解は深まらない。 ○ 高等部入学時から進路指導で積み上げられるものももっとあったかと思う。一般就労を希望する生徒の増加、困難事例の進路先開拓などが増えている。 ○ 事業所見学は、見学先の事業所のことをよく理解することができるとも良い機会なので、一度と言わず研修回数を増やしたい。	A 保護者 3 保護者 5 職員 1 0	○ 学部会の中で計画的に話題にする。 ○ 進路先の意向を保護者と確認したり、本人のキャリア形成を踏まえた進路指導を実施したりする。 ○ 呼びかけをしたり、保護者と情報を共有したりしていく。実態に応じて生単や総合などで将来や働くことについての活動を計画し取り入れる。 ○ 外部機関とつながる仕事は慎重に進める必要がある。 ○ 事業所見学は例年通りだが、来年度は事業所体験にも参加できるようにする。事業所見学の参加希望は、複数選択することも可能とする。

今年度の重点4 専門性の維持・向上				
項目	具体的方策・評価指標等	課題内容	達成度 評価項目	改善策
① ニーズに応じた教育	○ 生徒の実態を的確に把握。「個別的教育支援計画」を通し指導の充実を図り、「個別の指導計画」の適切な目標設定や評価の実施に努める。(知高)	○ 限られた時間の中、指導計画を作成しているが、学部としてより効率よく様式が作成できる手立てがとれると良い。	A 保護者 1 保護者 3 職員 1	○ 各学級の実態に応じて段階を下位段階や上位段階にあげるなど、基準を作成する。
② 学習指導	○ 生活や学習で習得した言葉を使って、自分の考えをしっかりと相手に伝えるとともに、相手の話を聞いて理解し、伝え合おうとする児童を育てる。(聴) ○ 教材研究や授業研究に取り組み専門性や指導力の向上を図り、児童の実態に応じた指導(知小) ○ PDCAサイクルによる指導と評価の一体化を図る。(教)	○ 子ども同士で話をする場や機会を作るように努めたが、自ら友だちに話をしたり、自分から質問したりする場面の設定。 ○ 教材研究や教材準備が十分にできていなかった。 ○ 生活単元学習の内容に学びが見えないものが多くなっている。	A 保護者 1 保護者 3 職員 3	○ 日常的に意図的に機会を設定する。 ○ 授業と同様に教材についても見合う機会や実態に近い児童の教材を共有し合っていく。 ○ 生活単元学習における学びのねらいが何かを学部内で共通理解するとともに、個に応じて練られた活動内容を設定する。
② 専門研修	○ 授業研究、日常的な研修及び実践を通して、幼児の発達や聴覚障がいについての専門性と指導力を高め合う。(聴) ○ 担当教科・領域の内容についての知識や指導法に関する見識が深まるように計画する。(教)	○ 幼児の実態把握と指導について日常的に話題にし、指導に生かしてきたが、指導内容についての打ち合わせの時間が思うようにとれないことがあった。 ○ 毎年実施が決まっている研修は、教員経験年数や本校在職期間での経験の差があるため、働き方改革の視点を踏まえ、やり方や対象者を検討する必要がある。	A 保護者 1 保護者 3 職員 8	○ 見通しをもって計画的に打ち合わせの時間をとる。 ○ 年度初めの個別の指導計画の書き方や障がい種別の研修は、1年間の教育活動に関わるため、参集型で確実にやりたい。
② 学校研究	○ 授業研究、日常的な研修及び実践を通して、生徒の発達や聴覚障がいについての専門性と指導力を高め合う。(聴) ○ 指導者間で幼児児童生徒の目標や内容を検討し、手立てを工夫しながら、目標達成に向けた授業づくりの実践を積み上げていく。(研)	○ 生徒にわかりやすく伝えるためのよりよい指導・支援の仕方について、指導者間で定期的に情報共有する機会をつくる必要があった。 ○ 生徒の目標や内容、手立てについて学部内で検討することができたが、先生方全員の意見を聞くことができるとよかった。	A 保護者 1 保護者 3 職員 9	○ 定期的に指導者間で有効な手立てについて情報交換を行う。 ○ 教員全員が「自分ならこういう授業をする。」という考えをもちながら、授業者全員で作る授業になるよう検討を進めていく。

今年度の重点5 保護者・関係機関との連携				
項目	具体的方策・評価指標等	課題内容	達成度 評価項目	改善策
① 理解・啓発	○ 送迎時の情報交換や緊急時の電話連絡、個別面談等を通して、児童の実態と指導・支援のあり方について共通理解を図る。(聴) ○ 学習、生活、進路等において連続性のある適切な支援に努める。(知中) ○ 地域公開や学校見学会等を通じて地域に開かれた学校づくりをめざし、本校の理解・啓発を促す。(教) ○ 保護者や関係機関との連携を密にする。(総) ○ 保護者や地域に向けて定期的に学校ホームページを更新することで、より学校の教育活動に対する理解が深まるようにする。(学) ○ 生徒、保護者の希望や実態に合った適切な進路決定ができるように、関係諸機関や事業所等とのつながりを大切に、進路指導を進めていく。	○ 少しでも天気が悪いと自力通学ではなく送ってもらうことが多かった。 ○ 年度末や年度初めの引き継ぎでは連携しているが、それ以外での連携は少ないのではないか。 ○ 本校の教育課程を理解した上で高等部受検に臨めるように、見学や体験の計画を見直したい。 ○ 会議時間の設定は、学校職員が同席するのは補欠等の体制を取る必要があった。 ○ ホームページでの行事などの掲載時期が遅くなるがあった。 ○ 入所希望の空きがなく、進路先が決まらないケースがあった。	A 保護者 5 保護者 6 職員 11	○ 保護者にねらいを確認し、協力を依頼する。 ○ 今年度の進路研修のように他学部の先生と話し合いたい。作業学習の系統性について高等部と話し合いたい。 ○ 年間行事計画の完成に合わせて、日程や内容を決めたい。 ○ 保護者と担当が出席できる日時を設定し、学部内の協力を依頼する。 ○ 各学部年間計画に担当者名を入れ月初めに声掛けする。 ○ 入所希望や医ケア生徒の受け入れ先が確保できるように福祉課に5月に定期的に情報を入れる。
② センターの機能	○ 聞こえやことばに関すること(就)	○ 9月頃から新規の教育相談依頼が増え、就支センター内で担当者を決めるのが難しい状況になった。	A 保護者 4 保護者 5 職員 12	○ 随時聴覚部教頭に相談し、調整する。

<学校評議員会より>

- ・ アンケートから「あまり思わない」「全く思わない」の方々が、自分の思っていることを言えているかが大切である。教員間でも同じことが言え、一人一人が言えていればよい。評価の上がり下がりはあるため、改善策を話し合うことができればよい。
- ・ 光陵高校、遊佐高校との学習がよい例であり、同年代交流の大切さを感じた。交流するときは、触れ合う機会を多く持つことが大切である。学校公開、バザー等の機会などに交流の機会をより持てると良いのではないか。
- ・ 学校で行事があった時には、子ども達が下校後に話題にしている。登校前もその日の交流があることを楽しみにして話す子どももいる。引き続き子ども達にとってよい教育活動をお願いしたい。
- ・ 地域との交流をこれだけ行っていることについて、教員の熱意と努力に敬意を払いたい。教育に100%完璧はないため、保護者の様々な意見や要望などに耳を傾けて、学びの連続性と繰り返しの活動について検証しながら教育活動を向上させてほしい。